

## 短 報

## 国際共同研究におけるミャンマー拠点形成の実際（2018年度）

増澤 祐子<sup>1)</sup> 小黒 道子<sup>2)</sup> 下田 佳奈<sup>1)</sup> 白倉真理子<sup>3)</sup> 野矢 麻子<sup>3)</sup> 堀内 成子<sup>1)</sup>

## Establishment of the Center of International Collaborative Research in Myanmar 2018

Yuko MASUZAWA<sup>1)</sup> Michiko OGURO<sup>2)</sup> Kana SHIMODA<sup>1)</sup>  
Mariko SHIRAKURA<sup>3)</sup> Asako NOYA<sup>3)</sup> Shigeko HORIUCHI<sup>1)</sup>

## 〔Abstract〕

The Asia Africa Midwifery Research Center has expanded its research to Myanmar in Southeast Asia in 2018. Myanmar has numerous maternal and child health problems. Therefore, we initiated activities with the goal of developing sustainable global nursing and midwifery leader training models focused on improving the quality of pregnancy, childbirth, and neonatal care. The project is for 3 years and aimed to establish a research-cooperation framework with Myanmar, which is a newly expanded base, during its first year. We invited the administrators of the University of Nursing, Mandalay and its cooperating organization, which is the mainstay for training young researchers, to Japan. Via this invitation, we offered opportunities for visiting nursing and midwifery educational institutions and perinatal medical institutions in Japan and exchange opinions with nursing and midwifery faculty members. We believe that an understanding of each country's situation and research purpose will strengthen future research-cooperation framework.

〔Key words〕 International Collaborative Research, Partnership, Myanmar

## 〔要 旨〕

本学に設立しているアジア・アフリカ助産研究センターの事業では、平成30年度より、母子保健課題が多く残る東南アジア圏のミャンマーにも研究拠点を拡大し、妊娠・分娩・新生児ケアの質改善を軸としたグローバルな看護・助産リーダーの育成を通じた持続可能な育成モデルを開発することを目標とし、新たな活動を開始した。本年度は、新たに拡大した研究拠点であるミャンマーとの研究協力体制の構築を目的とし、若手研究者養成の主力となるマングレー看護大学およびその協力機関の管理者を日本へ招聘し、日本の看護・助産教育機関や周産期医療機関の視察、看護・助産教員らとの意見交換の機会を提供した。お互いの国の状況や研究目的に関する理解は、今後の拠点形成強化につながると考える。

〔キーワードズ〕 国際共同研究、連携、ミャンマー

## I. はじめに

日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤事業の日本

側の研究拠点機関として、平成23年より本学にアジア・アフリカ助産研究センター（Asia Africa Midwifery Research Center：AMReC）を設立している。本事業

- 1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
- 2) 東京医療保健大学千葉看護学部・Tokyo Healthcare University, Chiba Faculty of Nursing
- 3) 聖路加国際大学大学院看護学研究科（修士課程）・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Master's Program

受付 2018年10月25日 受理 2018年11月10日

は、過去6年間（平成23－25年、平成27－29年）の研究拠点形成事業（B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）において、日本・タンザニア・インドネシアの3か国間で、研究交流基盤構築、協働セミナーの開催等を実現し<sup>1)－5)</sup>、各国の母子保健課題の解決に貢献してきた。平成30年度より、母子保健課題が多く残る東南アジア圏のミャンマー、ラオスにも研究拠点を拡大し、妊娠・分娩・新生児ケアの質改善を軸としたグローバル看護・助産リーダーの育成を通じた持続可能な育成モデルを開発することを目標とし、新たな活動を開始した。

ミャンマーにおける拠点機関はマンダレー看護大学である。本学とマンダレー看護大学は、平成28年度にミャンマーより教員・大学院生が本学に研修に訪れた後も、教員および大学院生間での交流が継続しており、平成29年度学術交流協定を締結した。マンダレー看護大学は、ミャンマー国内に3校存在する学士レベルの看護師養成機関のひとつである。大学院には修士課程を開設し、ミャンマーにおける看護の指導者・教育者・研究者を養成している。今年度は、ミャンマーとの研究交流初年度であるため、今後3年間のセミナー、研究者交流、共同研究に関する協議を行った。そのため、6月10～18日の約1週間、若手研究者養成の主力となるマンダレー看護大学およびその協力機関の管理者を日本へ招聘し、日本の看護・助産教育機関や周産期医療機関の視察、看護・助産教員らとの意見交換の機会を提供した。

本稿では、本年度より新たに拡大した研究拠点であるミャンマーとの研究協力体制の構築を目的とした、ミャンマーとの交流や、共同研究の実際について紹介する。

## II. ミャンマー拠点機関との取り組みの実際

### 1. 招聘の準備

ミャンマーよりマンダレー看護大学およびその協力機関の管理者を日本へ招聘するにあたり、事前に本学の教員がマンダレー看護大学へ向かい、現地で国際共同研究の目的などの確認とともに、招聘日程の調整と確認を行った。その後、ミャンマーの日本大使館にて、日本での短期滞在ビザ申請を招聘者自身に行ってもらうために、招聘理由書、身元保証書、滞在予定表、往復の航空券予約票を作成した。書類を送付の際には、ミャンマーの郵便事情を十分に考慮した上で、国際宅急便を利用した。今回の招聘では、ビザの申請・パスポートの取得に時間を要したため、招聘が実現するのかどうか肝を冷やす展開であった。また、英語はお互いに母国語ではないことも踏まえ、ミャンマー語と日本語の通訳の手配が必要だった。

表1 招聘スケジュール

| 日程  | 予定  |
|-----|---|
| 1日目 | 到着  |
| 2日目 | 本学学部長との交流<br>聖路加国際大学・聖路加国際病院の視察   |
| 3日目 | 本学学長との交流<br>母子保健に関する本学教員の講義   |
| 4日目 | ランダム化比較試験に関する大学院生クラスへの参加<br>論文クリティークの大学院生クラスへの参加<br>看護教育に関する本学教員の講義<br>セミナー（マンダレー看護大学学長による講演） |
| 5日目 | 助産院見学   |
| 6日目 | 聖路加国際病院、聖路加助産院での学生実習の様子を視察  |
| 7日目 | 共同研究に関する打合せ   |
| 8日目 | 帰国  |

### 2. ミャンマーからの招聘者と交流スケジュール

ミャンマーの研究拠点であるマンダレー看護大学の学長（医師）、教授（看護師）、マンダレー女性中央病院の看護部長の3名を日本へ招聘し、看護・助産教育機関や周産期医療機関の視察、授業への参加、看護・助産教員らとの意見交換の機会や、マンダレー看護大学の学長によるセミナーを企画した。招聘のスケジュールを表1に示す。各視察先や、授業への参加などの準備の際には、招聘目的や招聘者の特性を伝え、日程調整を行なった。

招聘スケジュール作成の際に留意した点としては、本邦や本学における看護・助産教育についての理解が深まるような機会を提供することはもちろんであるが、仏教徒であることや、食を大切にしていることなど、ミャンマーの文化的特徴も尊重したことがあげられる。また、共同研究を実施する若手研究者である大学院生が招聘期間のすべての日程において同行し、通訳などを行い、より理解が深まるような支援を行った。本事業の目的の一つには若手研究者同士の国際協働がある。若手研究者である大学院生にとっては、国際共同研究において欠かさない信頼関係の構築の良い機会となった。

### 3. セミナーの実際

ミャンマーの伝統的な正装である色鮮やかなロンジーを身に纏ったマンダレー看護大学の学長による「ミャンマーにおける看護・助産教育」の講演が行われた。本学の学生、教員のみではなく、学外からもミャンマーの看護・助産教育に関心を持つ、40名が参加した。講演では、ミャンマーの看護教育の歴史や、看護教育機関の数、具体的な教育プログラムの内容、ミャンマーで取得可能な看護学の学位なども含め、ミャンマーの助産・看護教育についての紹介から始まり、続いて、マンダレー看護大学での教育内容や学生の実際の実習の様子などをご紹介いただいた。講演の後には、活発な意見交換や交流会が実施され、多くの参加者がミャンマーでの看護・助産教

育だけではなく、看護師が抱えている信念なども含めた看護の実践についての理解を深める機会となった。

#### 4. 共同研究推進の準備

看護大学における教員と学生のそれぞれが認識する学習課題を明確にすることを目的に国際共同研究を準備していた。初年度は、助産・看護学生に焦点をあて、学生の認識する学習課題を把握することや、教育介入の効果について考察することを目的に研究計画を立案した。

##### 1) 動画による出産体験の共有が、助産師学生へもたらす効果の検討

女性が出産体験を語る動画を、ミャンマーの助産学生が視聴することにより、どのような効果をもたらすのかを明らかにすることを目的に研究を計画している。

日本助産学会国際委員会の活動<sup>6)</sup>の2016年度トヨタ財団国際助産プログラム「分かち合いから得られる出産の多様性と共通性」の一環で作成した動画(34分)を視聴後、フォーカス・グループ・ディスカッションを行う。このディスカッション内容について逐語録を作成し、動画視聴がもたらす助産学生への効果に関する内容分析を行い、動画による出産体験の共有によってもたらされた効果の内容を記述する質的記述的研究である。

調査実施に際しては、学生へのリクルート、研究参加の自由意志や個人情報、プライバシーの保護はもちろんのこと、通訳を介しての調査であるため、理解の確認なども含め、齟齬のないよう、双方の意図が明確に伝わるように、工夫することが重要である。

##### 2) 出産体験を語る動画がミャンマー女性にもたらす思い

ミャンマー人女性たちが、ミャンマー・ラオス・日本の女性の出産体験を語る動画<sup>6)</sup>を視聴することで生じる反応や思いについてその内容を明らかにすることを目的に、研究を計画している。

ミャンマー連邦共和国の東部において、出産体験のある女性が動画を視聴した後、フォーカス・グループ・ディスカッションを行う予定である。このディスカッションの会話の内容について逐語録を作成し、動画視聴による反応や思いについての内容を分析する質的記述的研究である。

調査の実施に際し、ミャンマーの識字率は女性が64.6%と低い事、自分の意見を述べることに躊躇・遠慮する文化を考慮し、研究協力を受けることへの心理的負担を最小限にすることを考えた。調査実施の際には、通訳の支援も借り、どんな思いも尊重されることを予め説明し、自由に発言できるような和やかな雰囲気を作るように配慮を行う予定である。

### Ⅲ. おわりに

ミャンマーとの研究協力体制の構築、連携強化を目的とした交流や、共同研究推進の準備の実践について紹介した。3年間のプロジェクトの初年度にあたり、互いの国の事情を説明、共有しあい、関連する人々が直接会って人柄を知り合い、研究課題や現場のニーズを確認しあった。お互いの国の状況や研究目的に関する理解は、今後の拠点形成強化につながると考える。

#### 謝 辞

本稿は、JSPS 研究拠点形成事業(2018-2021年、代表：堀内成子)の助成を受けて実施している事業内容を元にまとめたものである。

#### 引用文献

- 1) 福富理佳, 五十嵐由美子, 新福洋子ほか. タンザニアの医療施設における早期必須新生児ケア(EENC)のセミナー実施報告. 聖路加国際大学紀要. 2018;4:58-62.
- 2) Tohi A, Horiuchi S, Shimpuku Y, et al. Overcoming barriers to inclusive education: A reproductive health awareness programme for adolescents in rural Tanzania. *Afr J Midwifery Womens Health*. 2016;10(1):27-32.
- 3) Shimpuku Y, Horiuchi S, Leshabari C.S, et al. Global Collaboration Between Tanzania and Japan to Advance Midwifery Profession: A Case Report of A Partnership Model. *J Nurs Educ Pract*. 2015;5(11):1-9.
- 4) Mwilike B, Shimoda K, Oka M, et al. A feasibility study of an educational program on obstetric danger signs among pregnant adolescents in Tanzania: A mixed-methods study. *International Journal of Africa Nursing Sciences*. 2018;8:33-43.
- 5) Shimoda K, Horiuchi S, Leshabari S, et al. Midwives' respect and disrespect of women during facility-based childbirth in urban Tanzania: a qualitative study. *BMC Reproductive Health*. 2018;15:8.
- 6) Hashimoto M, Oguro M, Shimazawa K, et al. Sharing birth experiences among women through movie viewings in Myanmar, Laos, and Japan. *ICM 2018 Midwives Combined Regional Conference for Eastern Mediterranean, Southeast Asia & Western Pacific Regions*. 6-8 September 2018 / Dubai-UAE. Abstract Book. 2018:73 [Internet]. [http://www.midwivesdubai2018.org/files/ICM\\_Dubai\\_2018-Abstract\\_Book.pdf](http://www.midwivesdubai2018.org/files/ICM_Dubai_2018-Abstract_Book.pdf) [cited 2018-10-22]